

II 高機の技術

— 箭山つむぎ —

【繊維の種類】

以前は、麻、絹、木綿となんでも織っていたということだが、最近糸に紡いで織ることはないようで、麻等あまり扱わないとの事である。

麻 家の前の畑に植えていた。丈は五～六尺程になってから切り、風呂で蒸していた(注1) 熱いうちに、竹を二つ折りにした抜き箸のようなもので皮を削り、のちに干す。白水にごま油を混ぜたものの中に、皮を浸し、しばってから竹に結んで板の間に叩きつけると、小さく裂けてばらばらにほぐれる。

これを指先で細かく裂き、端をより合わせてつなぐ。この糸に撚りをかけるため糸車を使用する(糸車は木綿の項で後述)

絹 繭を鍋に入れて煮る。中まで煮えた時、箸でよくかきまわすと糸口が出る。繭から初めて出る糸は、悪い糸だと言って取り除いてしまう。良い糸になってから、三筋なり四筋なり好みの大きさにするが、重並さんは30個の繭を併せて一本の糸にしている。(注2) この時に、ツツミ(PL1-A)という道具にワク(糸枠)(PL1-A・第2図)をとりつけて、ツツミの金具の先端に、ほぐした糸口をひっかけて、右手で回しながら、左手で繭の繊維をささえて巻きつけていく。繊維が細くなれば他の繭を取り添えて、太さにむらのないようにする。こうしてできあがった繊維に糸車で撚りをかけて糸にする。

ちなみに、繭一個の繊維の長さは、3里程あるということである。

木綿 収穫された棉をサネクリ(PL1-B)と呼ばれる棉実繰り機にかけて、棉と実とを分ける。サネクリというのは、実の中の核(サネ)をくり出すという意である。この選りわけられた棉をクリワタと呼ぶ。それを、綿打屋に出し、打って綿にしてもらう。これをワタウチという。打った綿を拵げ、竹や茅の茎などでその上をころがすと綿がそれに巻きつく。指の太さ程に巻きつけてのち芯の竹を引きぬく。これをシノという。(注3)

シノから糸車(PL2-C)にかけて、糸にするわけであるが、シノの糸口の先端を糸車のツメ(PL2-C)(管一竹管)に結び、左手の伸びるだけ糸を引き出し、右手で車をまわす。(この状態で、繊維だったものに撚りがかかり糸となる)

次には、糸車を逆回転して、撚りのかかったぶんをツメ(第3・4図)に巻きつける。この動作をくり返して長い糸にするわけである。これをイトヒキといい、糸をひくのと、撚りを入れるのと同時作業である。

以上、木綿の糸にするまで、サネクリ、ワタウチ、シノ、イトヒキのつごう4行程がある。糸車は、糸撚車、紡車、糸繰車等の別称があるが、木綿の他、絹糸、麻糸等にも撚りをかけるのに使用した。しかし木綿・麻・絹はそれぞれ、糸車のツメ(クダ)の太さが異なるそうである。

【糸から布へ】

糸車で撚り、糸を引いたのちに、ツメ(クダ)を車からはずし、シシャク(PL2-D)にかける。70回を7度巻いたものを1カセといい、1カセは大体、クダに巻きつけたものが6箇程に相当するようである。

さらに、シシャクに巻きつけられている糸をカセクリ機(PL3-E)でくる。その後に、箄と村に入れ布を織っていくのであるが、箄に入れる前に、メンドシと呼ばれる作業がある。これは縦糸の1本1本をひろって、縦糸を奇数目のものと、偶数目のものとの二群に大別し、アゼと呼ばれる一本の棒にならべて作った多数の糸輪に、いずれか一方の縦糸群の1本1本を通しておき、その棒の縦糸が他の縦糸と分かれて、その間に横糸を差し込む余裕ができる。これを杼口と呼ぶ。そして全縦糸を箄に収容するのである。箄(PL3-F)は、縦糸を平等に分配し、縦糸と縦糸との間隔を同じにし、縦糸を打ち込む役目をする。

これで縦糸は完成し、機に挿入される。一方、横糸は杼(PL4-G)と呼ばれる船形のものの中にある芯棒に糸を丸くたばねて収容される。

重並さんの使用している機はタカバタ(PL4-H)で姑さんが使っていたのを、補修しながら現在も使用している。

上方から綜統(注4)と箄を吊り縦糸を巻いておくものと(注5)織れた布を巻きとるものと(注6)装置されている。綜統は下方からの踏木によって、左右の足を交互に踏み替えて奇数目と偶数目の縦糸群の綜統をそれぞれ上下して杼口を開けるようにしている。

織手は、この杼口に杼を交互に軽く投げ通し、箄を手前に打ちつけ横糸の目をつめる。

重並さんは、1反を織るのに18カセ程使用し、織りあげるのには4~5日程かかるということである。

(注1) 一般には、根を切り葉打ちをして、茎皮を剥ぎやすくするため、毎朝水につけては、蔭干にして醗酵させたり、あるいは地面に穴を堀って、薪・石・麻の茎という順に積みあげ、下から火を焚いて、さらにこの上から水を注いで、焼石の蒸気でむれるような仕掛けをしたり、また何軒かの家が共同で、大釜に6尺もある茎を何本も立てならべ、その上から大桶をかぶせて蒸したりする等の方法がとられている。

(注2) ツツミで糸をとる時に、1度に30個の繭からとりだすのではなく、3筋なり4筋なり手ごろに引き出し1本の糸になる時に丁度、30個分にするようである。

(注3) シノ、一般にはシノマキと呼ばれる行程である。シノは作業を表す意ではなく細い篠竹を芯に使ったところから広まった用語だと思われる。

(注4) 重並さんのタカバタには、綜統という器具の名称はないが、恐らくアゼが綜統の役目を果たすと考えられる。

(注5) 一般に縦糸を巻いておくものは、オマキと呼ばれている。これに縦糸を巻きつけておき、オマキの下にある歯車で固定して、縦糸を強くはっておく。

(注6) 一般に織れた布を巻きつけておくものは複(チ巻・チマキ)と呼ばれている。

参考文献

- 日本民俗資料辞典 ● 民具入門 宮本 馨太郎
- 大分大学学芸部研究紀要 丹生川調査報告
- 柳田国男全集 卷14.「木棉以前の事」

【箭山つむぎのおばさん】

大分県下毛郡三光村下深水 重 並 ハルヨ(82才)

すでに80才を越えたおばあさんとは思えないほど元気で、機を織りつつけて、60年になる。おばあさんは、いまでも慣れた手つきで、あざやかに布を織っている。その生活ぶりは、質素そのものだ。おばあさんが織るつむぎは「箭山つむぎ」と呼ばれておりこの箭山と言う名称は、この地の八面山が俗に箭山と呼ばれているので、そこから出たものではないかと思われる。

あ と が き

初夏 私達は、重並ハルヨさんを尋ね高機の話聞く機会をえた。おばあさんの家は、古びた切妻の納屋風の建物、一ぱいに開け放された窓。土間には措え付けられたままの高機があった。おばあさんの案内で、二階に上ると、糸車や糸枠等の製糸用具が、彼女の生活用品と同居していた。今までにも、折にふれ見た事はあるものの、こうして説明を聞きながらじっくりと、目に止め、手に触れるのは初めての経験であった。

その折に、重並さんの技術を収録し、併せて製糸紡織の歴史を考察しようという気運がおこり発行に至ったのであるが、いざ採録編集の段階になると、思うように資料が収集できず、まとまりのつかないものとなってしまった。残念なのは、機織の具体的な仕事を見ることが出来ないうちに、執筆するようになった事である。が、一応体裁をつくろい、拙いものながらも文書のはこびとなった事は一同の喜びである。

最後に、度々の訪門にも快よく応じて下さり、忙しいところを御協力いただいた重並ハルヨさんに感謝の意を表します。

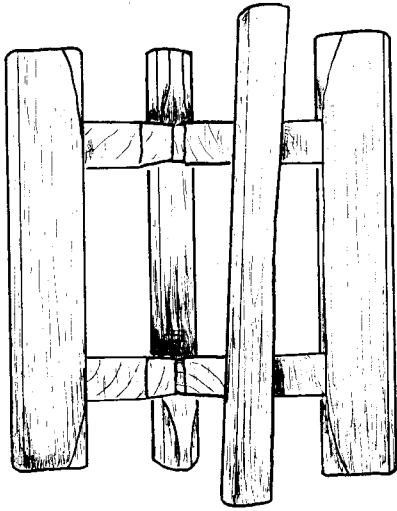
おばあさんは今年八十二才とお聞きしますが、ますますお元気の御様子、これからもいっそうの御活躍を期待してあとがきとします。

見 学 者

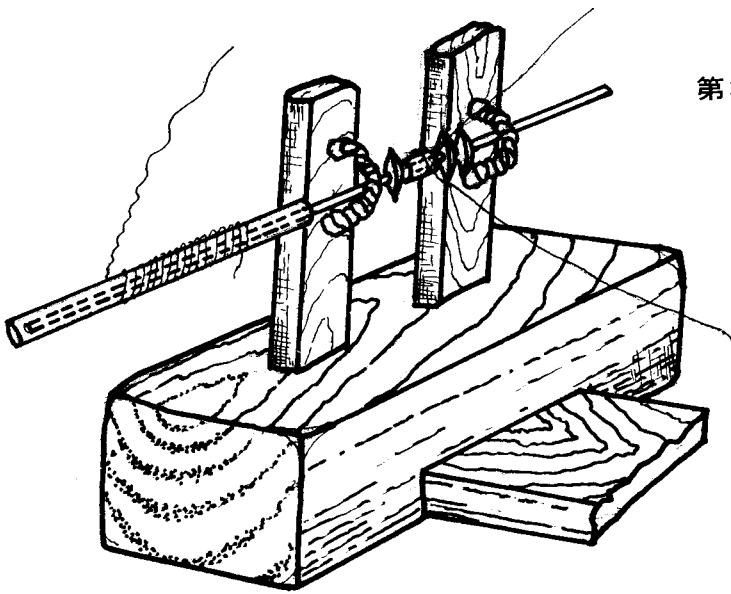
橋 昌信

坂本 和昭 永田 英二 佐藤 政夫 網田 克美 石岩 章子 倉原 謙治

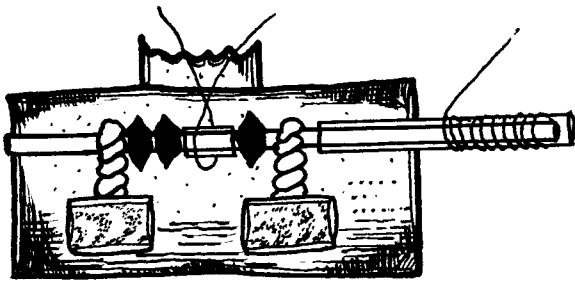
坂本 嘉弘 藤田 和夫 牧尾 義則 松田ミユキ 渡辺 靖彦



第2図 イトワク (糸枠)
(21cm × 13cm)



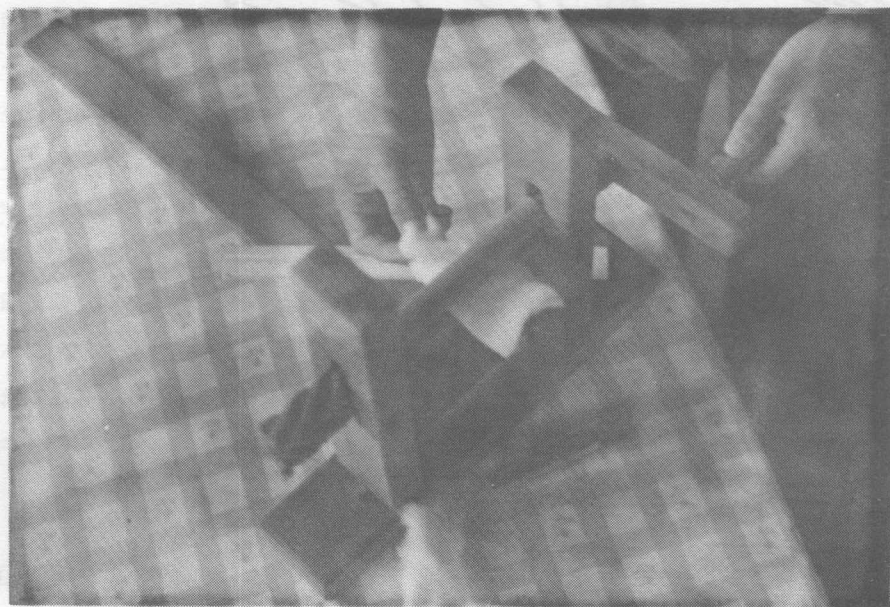
第3図 ツメ拡大図



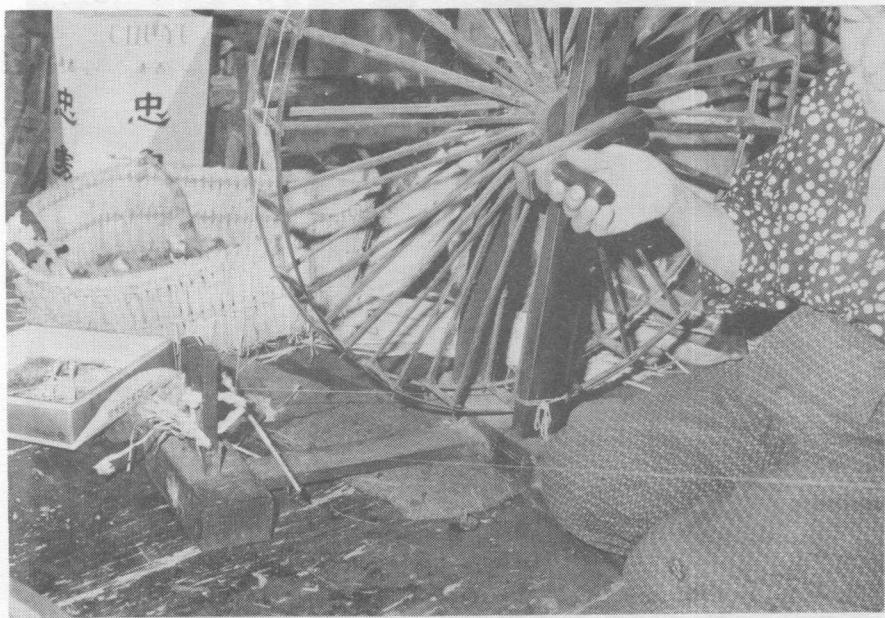
第4図 ツメ平面図



A ツツミとワク（糸枠）



B サネクリ

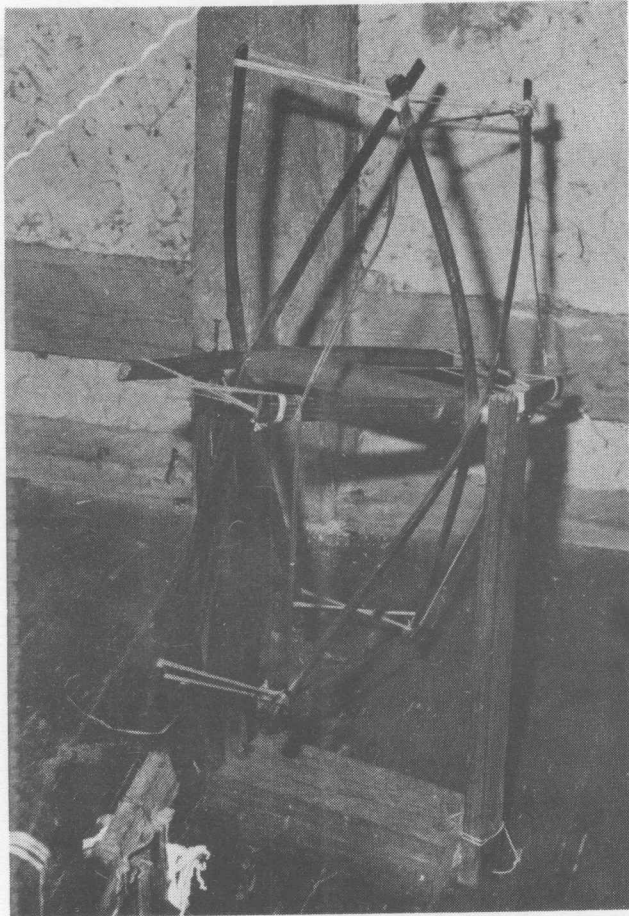


C 糸車とツメ

(系) 糸車



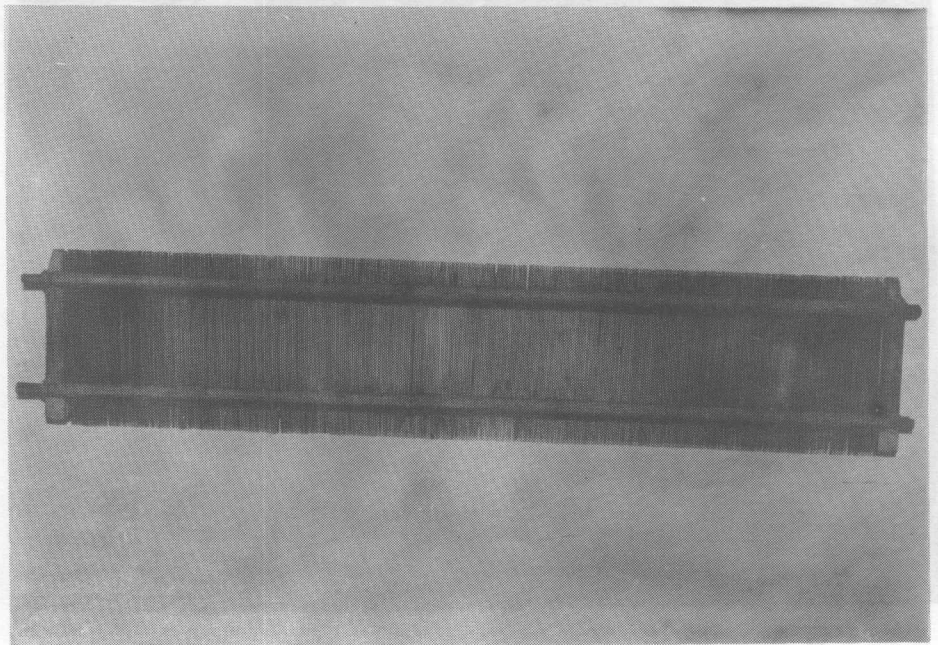
D シシャク

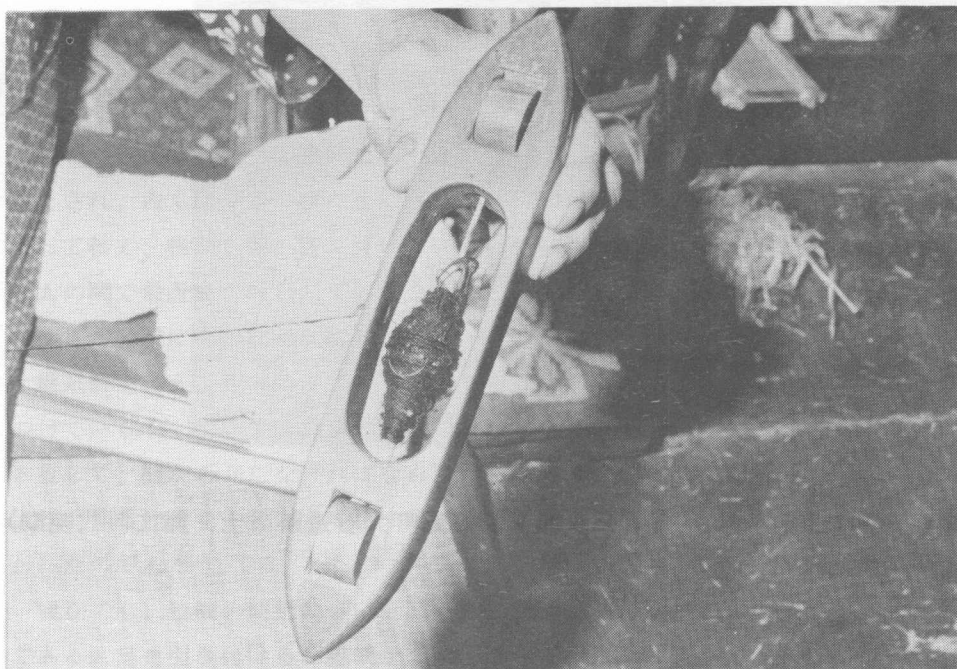


← E. カセクリ機

竹の束を

F. オサ (箆)



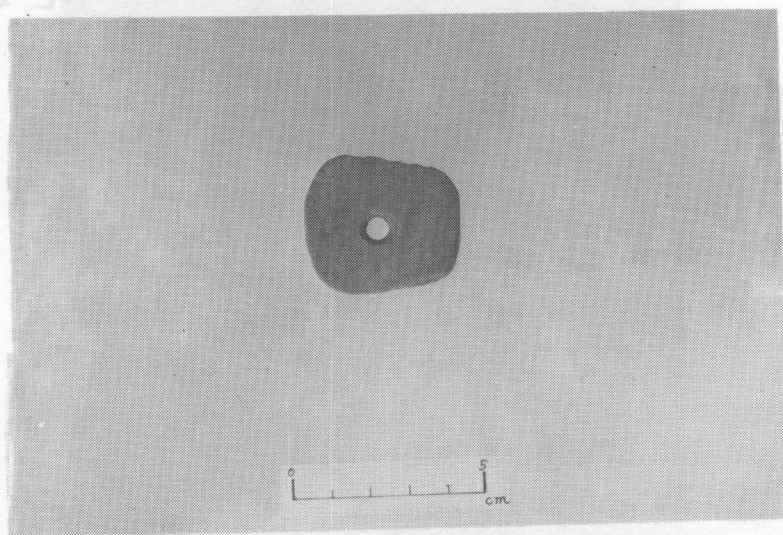


G. ヒ (杼)

杼を廻す二枚の皮手があるのが特徴で、手廻しに引つけられるための皮手がある。



H. タカバタ



I 紡錘車形土製品（大分県大野郡緒方町大石遺跡出土、縄文時代晩期）

重並 ハルヨさん



地 機

地機その名称は居ざり機ともいうが、織手が足を投げだして坐りこむといった姿勢から生まれた名であろう。地機は織機の初源的形態とされ、古くは立木に縦糸をしばりつけ、その端を自分の腰に一括して結え、横糸を編み込んでいくといった技法がポリネシアの未開人の間で最近まで行われていたということである。我が国の古事記や日本書紀にその記載が認められるが、通常のもは、織手の腰に縦糸群を結え、片方の足に紐で綜統を自在に操つれるように結びつけている。従って織手は諸事の度にいちいち腰の縦糸と足の紐を解き放して、機から立たなければならない。このような諸々の理由により、作業能率を一段と合理化するという目的で高機への改良が行われたのであろう。

現在でも、地機の使用は多いと聞く。表紙の写真は、地機の模型である。足を引き付けると綜統が上に上がり、縦糸の一群が分かれ杆を差し込むことによって、横糸を通す。織手の左手にあるのが杆であり、右手をかけているのが手前に打ちつけるための箠である。

別府大学
博物館研究報告 No. 1 (1972)

発行日 昭和48年6月15日
発行所 大分県別府市北石垣82
別府大学博物館学講座
代表者 賀川光夫
編集者 橘昌信
印刷所 土屋軽印刷